

# ジオルジの現象学的心理学と、 現象学的方法の応用の問題

野 村 文 宏

## 【要 旨】

フッサールは、自らの現象学的方法を様々な学問分野へと応用可能なものだと考えていた。そのひとつとして現象学的心理学を考え、これに独自の意義を与えている。心理学に現象学を応用している実践者にジオルジがいる。彼は具体的分析を行うことで、心理学的事象に合わせて現象学的方法を修正・発展させている。フッサールの現象学的方法とジオルジの現象学的方法の修正を比較することで、現象学的方法の応用可能性を考察する。

## 【キーワード】

現象学、現象学的方法、フッサール、ジオルジ、心理学

## はじめに

フッサールは、自らが創始した現象学とその方法が諸学問分野へと応用されることを期待していた。そして、その期待は彼の弟子たちによって様々な方向で実現され、その成果は『哲学および現象学研究年報(Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung)』に掲載されており、その内容は、倫理学、法学、心理学、数学、美学、言語学など多岐にわたっている。しかし、『イデーニ I』以後、フッサール自身の思索の深まりと進展によって、彼の現象学が超越論的現象学の色合いを深めていくと、弟子たちはフッサールからいわば離反していった。さらに、フッサールの現象学が超越論的現象学として体系的に整えられていく中で、現象学の方法は、一般的には、超越論的な考察のための方法として受け止められることが強くなってきたように思われる。

本稿においては、現象学的方法を他学問分野へと応用していく可能性の一つとして、心理学の分野に焦点を当てて考察する。そのために、まず、現象学的心理学についてフッサール自身の主張を確認する。次に、現象学を心理学に応用している実践者として、アメディオ・ジオルジの試みを取り上げる。彼は現象学的方法に修正を加えているが、その修正について考察し、その上で、現象学的方法を心理学に応用することの問題点を検討することとする。

## 1. フッサールの現象学的心理学

フッサールは、「ブリタニカ草稿 第四草稿 (最終稿)」<sup>1</sup>の冒頭において、「アプリアリな純粹心理学あるいは「現象学的心理学」」について述べる。彼の規定によれば、これは一方では、「哲学的な現象学」と「方法的にも内容的にも平行関係にある新たな心理学的な学科」であり、他方で、経験的心理学の「原理的な方法的基礎」となるような学科である (Hus. IX, S. 277-278)<sup>2</sup>。この「ブリタニカ草稿」において現象学的心理学は、哲学的な現象学ないし超越論的現象学がどのようなものであるかを理解するための、予備的な段階に位置づけられるものとして説明されているのだが、これに沿って、現象学的心理学がどのようなものであるかを確認していきたい。

フッサールは、純粹心理学を、純粹自然科学との平行関係において説明している。そこでの純粹自然科学とは、「どこまでも一面的な見方を貫いて、実在のもつ物理的規定以外の諸規定すべてを無視する客観的な自然科学」のことである。では、それに平行する純粹な心理学とはどのようなものなのだろうか。それは、物理的自然がもつ物理的な特性ではなく、「心的な特性」を主題とした、「心的なものの根本諸概念をその固有本質的な諸規定によって獲得する」ような学問である (Hua. IX, S. 278)。

したがって、ここでの「純粹」という語の意味は、<そのものに固有の本質的な規定に従い、それ以外のものを混ぜない>という意味である。つまり、純粹心理学とは、心的なものに固有の本質的な規定から心的なものを扱い、心的なものと同置される物理的なものの物理的規定を混入させるような分析をしない、ということになる。

では、そのような純粹な心理学をフッサールはどのようにして遂行しようとするのだろうか。フッサールはそのために、彼独自の方法を仕上げていくのだが、フッサールの純粹心理学の方法について順を追って見ていくことにしよう。

純粹な心理学の対象は、「もっとも直接的な経験」としての<心的なもの>であるとされるが、これを手に入れるための方法は「反省」である (Hua. IX, S. 279)。反省以前の日常的な生においては、私たちのまなざしは直進的に対象に向かっていくから、心的な体験する働きそのものは私たちのまなざしの中に入ってこない。それゆえ反省によってまなざしを向け換え、心的な体験する働きそのものを把握するのである。

ここでフッサールが、私たちの直接的な心的経験、端的には分析を遂行する現象学的心理学者「自身」の心的経験を把握しようとしていることに注意しておく必要がある。現象学的心理学が取り扱う経験が、分析遂行者自身の経験に限られるか、が問題となるからである。この点については後述することとする。

この反省を通じて把握される、主観的な体験ないし心的な体験は、「現象」と呼ばれる。直進的にまなざしが向かう対象は「主観的な体験の中でわれわれに「意識」されるのであり、われわれに最も広い意味で現出するからである」 (Hua. IX, S. 279)。この「現象の領域」 (ebd.)こそが純粹な心理学が成立する場となる。この現象の領野の根本性格として、フッサールが取り上げるのが「志向性」である。反省の中で把握される主観的な体験は、「についての-意識」という性格をもつことから、「志向的体験」 (Hua. IX, S. 280) と呼ばれる。

まなざしを心的なものという場に向け換えた後、先の「純粹」性の確保が課題になるが、「純粹に現象学的な場に接近するための特殊な方法」が「現象学的還元」 (Hua. IX, S. 282) である。では、純粹現象としての意識を獲得するためにどうして、現象学的還元を行う必要があるのか。また、現象学的還元とはどのようなものなのであろうか。

フッサールによれば、経験的心理学者の態度も、また同様に自然的態度のうちにある。「心理学者の自己経験がすでに総じて外的経験——すなわち心的でない実在的なものの経験——と絡み合っている」(Hua. IX, S. 282)。それゆえ、純粋な意識についての心理学を目指す場合には、純粋現象としての意識を獲得するために、このような外的なものを判断停止(エポケー)する必要がある、とされている。では、ここで判断停止される必要のある「外的なもの」とは、どのようなものなのだろうか。そして、判断停止によって純粋な心理学に残されるものは、どのようなものなのだろうか。

自然的態度と客観的措定(objektive Setzungen)との関係は、『イデーニ I』第二七-三十節において「自然的態度のなす一般定立」として詳述されているので、確認しておこう。自然的態度とは「ごく自然な普通の生き方をしている人間」の態度であるが、そのような態度において、私たちは「世界を直接直観的に、現にそこに存在しているものとして、眼前に見いだし」ている(Hua. III/1, S. 56)<sup>3</sup>。そのような自然的態度においては、世界は総じて「現にそこに存在する「現実」として意識される」という意味で、定立されており、それは「一般定立(Generalthesis)」と呼ばれている(Hua. III/1, S. 60f.)。「措定(Setzung)」と「定立(Thesis)」は同じ意味と考えてよい。それゆえ、一般定立とは、「ブリタニカ草稿」の表現で言えば、「反省されていない意識のなかでなされた客観的措定」のことであり、現象学的還元とは、この客観的措定を「ともに遂行するのをいっさい禁止」し、「それとともに、おのれにとって端的に「現に存在している」世界に、判断するという仕方に入り込むのをいっさい禁止」することである(Hua. IX, S. 282)。

このように、客観的措定ないし一般的定立を判断停止するのはなぜかと言うと、「現にそこに存在しているものとして、眼前に見いだされる」対象は、実在的なものとして意識を超越しており、意識に内在的に与えられている純粋な所与ではないからである。それゆえ、現象学的還元は『現象学の理念』において次のように表現されている。「現象学的還元とは、いっさいの超越者(私に内在的に与えられていないもの)に無効の符号をつけることであり、すなわちその超越者の実在と妥当性をそのまま立てるのではなくて、せいぜい妥当現象として立てることである」。さらに続けて「たとえば、いっさいの心理学や自然科学など、あらゆる科学を私はただ現象として利用しうるにすぎず、したがってそれらを私にとって手掛かりになりうる妥当的真理の体系としては、また前提としても、仮説としてさえも、利用してはならない」(Hua. II, S. 6; vgl. Hua. III/1, S. 65f.)<sup>4</sup>と述べられている。したがって、現象学的還元において、判断停止(エポケー)され遮断されるものは、自然的態度における一般定立である。さらに、その帰結として、妥当的真理としての諸学問の成果も遮断され、利用することができないことになる。

では、現象学的還元によって何が残されるのだろうか。フッサールが現象学的還元において意図していたのは、世界を現実存在として定立する意識の働きを遮断して、意識の純粋な所与を、主題として守り抜くことであった。それゆえ、現象学的還元によって、純粋な意識の場が主題化され、そこにおいて意識の純粋な所与が残されるのである。

現象学的心理学が、心的なものそのものについて、「純粋に」探求する学問であることはこれまで述べてきた。そのための純粋に心的な領域を獲得するための方法が、心理学的-現象学的還元であった。その上でフッサールは、この純粋に心的な領域において、形相的現象学へと歩みを進めていく。そこで中心となる「形相」は、「本質形式(Wesensform)」「本質必然的な形式スタイル(wesensnotwendige Formstil)」「不変な本質形式(invariante Wesensformen)」「不変な構造体系(invariantes Struktursystem)」とも呼ばれているが、この形相とは、「可能なすべての心的存在が、そもそも思考可能であるべきだとすれば、可能なすべての心的存在を

貫いているのでなければならない」ようなものとされる。「たとえば、物体知覚の現象学は、事実に生じている知覚や期待される知覚についての報告などといったものではなく、不変な構造体系を取り出すものである。つまり、それなしには、物体の知覚も、また同一の物体の知覚そのものがもつ総合的調和の多様性も考えられないような、不変な構造体系を取り出すものなのである」(Hua. IX, S. 284)。このような形相を取り出すことが、形相的現象学の目的であり、そのための方法が形相的還元である。その方法はさらに、次のように述べられている。「現象学的事実性が、ただ範例的に、そして、ただ事実的な個別的な心や心的共同体をアプリアリに可能な(考えうる)ものへと、自由にしかし直観的に変更するための土台」となることで、「理論的な眼差しがこの変更の中で必然的に持ちこたえる不変項に向かう」ことによって行われる(Hua. IX, S. 284)。

「ブリタニカ草稿」における以上の説明の中には、フッサールの自由変更にもとづく本質直観ないし形相的還元の方法が、実はかなり詳細に述べられ含まれているのであるが、少しわかりにくい。まず、私たちが経験的に出会う事実は、個別的なものであり、一回的なものである。それは、そのつど「流れ去ってしまうもの」である。しかしこのような個々の対象は、ただ単に一回限りの「ここにあるこのもの(Dies da)」ではなくて、それ自身のうちに「本質」をもち、したがって「純粹に把握されるべき形相をも」っている(Hua. III/1, S. 12)。このような個別的な事実がもつ本質的なものをフッサールは把握しようとし、事実を本質へと変換する手続きが形相的還元である。

では、形相的還元は具体的には、どのようにして遂行されるのであろうか。フッサールはそれを、自由変更の過程に基づく本質直観として考えている。『イデー I』においては、音の知覚を例にとって「個別的な音から(個々に、あるいは他の諸々の音との比較を通して「共通なもの」として)直観しつつ取りだす」ことであるとされ(Hua. III/1, S. 13)、『デカルト的省察』(§ 34)や『経験と判断』(§ 87-93)、および現象学的心理学についての1925年の夏講義(§ 8-9)においては、自由変更の過程に基づくものとして叙述されている。それらの著作を総合すると、形相的還元の方法は、次のような段階を踏んで行われる。第一段階として、知覚や想起、想像において与えられる事例から出発して、第二段階で、それを個々に、あるいは他の事例的対象と比較し、第三段階として、それらの事例としての対象の内に、共通なものとしての本質が浮かび上がってきて直観的に取りだされる。第一段階では、事実を、事例として、つまり可能的な一つの事例とみなすことにより、またその事例を想像によって自由に変更することにより、諸々の変項を作り出し、その事実がもつ可能性の領野を開く。これが「自由変更(freie Variation)」と呼ばれる方法である。自由に変更していくうちに、それらの諸変項のなかで重なり合う不変部分、すなわち共通部分が生じてくる。それがその事実における本質部分である。そしてそれは私たちがもっている、そのような本質を直観する作用、すなわち本質直観によって端的に把握されるのである。このような本質は、個別的な事実がもつ可能性を貫いているものであると同時に、逆にこのような本質があるからこそ個別的な事実が可能となる、そのようなものである。

ではこのような形相的還元によって取り出される本質とは、いかなるものなのか。『イデー I』における説明を追うことで確認しておこう。フッサールによれば、現象学的還元が開く意識の次元がどのようなものであるかということ、それは「様々な次元に関して繰り返される波動作用」である。そのため、「形相的単独態の一義的規定ということは、われわれの記述的領野において全く問題とならないのであるが、一方、高次の段階の種的特殊性を具えた諸本質については、事情は全く別様なのである」(Hua. III/1, S. 157)。ここで述べられている、形相的単独

態とは、本質の個別態として見られた場合の個物である (vgl. Hua. III/1, S. 17)。これはどうやって把握されるかという、「個物を個物たらしめている要素」、すなわち「個別化」の契機だけを、現象学は捨て去り見捨てる。「しかし本質内実ならばその全部を、その具体化の充実に於いて、現象学は、形相的意識の中へと高めて引き上げ、その本質内実を、理念的同一的な本質として受け取る」とされている (Hua. III/1, S. 157)。そうすると、それによって浮かび上がってくるのは、形相的単独態より、より高次の段階の種的特殊性を具えた諸本質である。そして、浮かび上がってきた本質を、本質直観、すなわち「端的な抽象による本質把握」によって取り出すのである (Hua. III/1, S. 155)。以上が、形相的還元および本質直観の方法である。

したがって、フッサールの本質直観の方法によって把握される本質とは、形相的単独態より、より高次の種的特殊性を具えた諸本質である。それは、形相的単独態より、より高次の本質であればよいのであって、高度に普遍的な「最上位の類」でなくてもよい。フッサールの本質は、きわめて高度な普遍性をもつ本質と誤解されがちであるが、彼の本質は、低次の本質から高次の本質に至るまで様々な類の普遍性の段階において広がった、幅広い本質なのである。幅広い本質であるから、低次の普遍性においては、類型の本質ないし形態学的本質と呼ばれる本質を含んでいる。それは記述的自然科学でいえば、「ギザギザの」「刻み目の入った」「レンズのような形をした」「散形花状の」といった類型の本質と、平行的に語られるような具体性をもった本質なのである (Hua. III/1, S. 155)。

これまで、フッサールの現象学的心理学の方法について確認してきた。心理学的-現象学的還元によって純粋性が確保され、形相的還元によってアприオリ性が確保されることで、「アприオリな純粋心理学」が成立するとされていた。この現象学的心理学は、「(ただ内的経験だけに純粋に基づいた、学問的に厳密な形態の心理学としての) 純粋に現象学的な心理学」(Hua. IX, S. 288)として、独立に存在することもでき、経験的心理学を革新するという機能も期待されていた (Hua. IX, S. 285ff.)。経験的心理学に対して、本質学として基礎となる諸概念を提供する、というのである。だが、フッサール自身の思索の歩みのなかでは、現象学的心理学は、超越論的現象学のための準備作業として位置づけられていく。そのため、フッサール現象学と言うとき、超越論的現象学の側面において理解され、その方法も、超越論的現象学の方法として理解されている。

しかしながら、フッサールの現象学的方法が他の学問分野への応用可能性をもっていることもたしかであり、それゆえ現象学を諸学問分野へと応用しようとする試みがある。その際、それぞれの応用が、現象学とその方法に魅力を感じて現象学に接近しようとするのであるが、そのアプローチは様々である。それは現象学の理解と現象学への着目点が異なるからである。次節では、そのような試みの一つとして、現象学的方法を心理学に応用する、ジオルジの現象学的心理学に目を向けてみよう。

## 2. ジオルジの現象学的心理学

本節では、現象学を心理学に応用している現象学的心理学者として、アメディオ・ジオルジを取り上げ、彼の現象学の理解と現象学的心理学の方法を中心に確認することとする。

ジオルジは、自らの現象学的アプローチおよび現象学的方法の説明に先立って、「いくつかの現象学的原理」と「哲学的現象学的方法」を説明している。これはジオルジの理解によるフッサール現象学の説明となっている。ここでは、まずこの現象学的原理と哲学的現象学的方法を確認することとしたい。その後で、彼の現象学的心理学の方法を見ていくこととしよう。

まず、現象学的アプローチの原理として、ジオルジは二つのものを挙げている。一つ目は、フッサール自身が「一切の原理のなかの原理」と呼んでいるものである (DPM, p. 69, 邦訳79頁)<sup>5</sup>。フッサールの『イデーニ I』から該当箇所を引用しておこう。「すべての原的に与える働きをする直観は、認識の正当性の源泉であるということ、つまり私たちに対し「直観」のうちで原的に、(いわばその生身のありありとした現実性において) 呈示されてくるすべてのものは、それが自らを与えてくる通りに、しかしまた、それがその際自らを与えてくる限界内においてのみ、端的に受け取られねばならないということ」である (Hua III/1, S. 51)。この「原的に与える働きをする直観 (originär gebende Anschauung)」とは、フッサールにおいて、直観が対象を<それ自体として、オリジナルとして>与えることを意味している (Hua. III/1, S. 11)。

二つ目の現象学的アプローチの原理は、自由想像変更の方法である (DPM, p. 69, 邦訳80頁)。ジオルジは『イデーニ I』の第70節を参照するよう指示している。その箇所においてフッサールは、本質把握のためには、知覚のみならず、自由な想像が卓越した重要性をもつことを述べている。ここでの方法は、すでに第一節で詳述したように、後に「自由変更 (freie Variation)」と呼ばれるのであるが、ジオルジは、これを「自由想像変更 (free imaginative variation)」と名付け、本質を明瞭化するものと理解している (DPM, p. 88, 邦訳102頁)。ジオルジの表現では「自由想像変更は、解明されるべき現象の、ある面を心の中で取り除き、そうすることで、その取り除きが、現前しているものを本質的な仕方に変形するかどうかを見ることを求める」ものである (DPM, p. 69, 邦訳80頁)。この説明の仕方は、フッサールとはやや異なるものの、同一のことが意味されている。

次に、フッサールの現象学の方法であるが、ジオルジの理解では、超越論的現象学的還元、形相的還元、本質の記述の三つから構成されている。

第一の超越論的現象学的還元の方法であるが、これを哲学的に探求するフッサールの最終的な立場としてジオルジは理解している。他方で、このような「超越論的還元から解放された現象学的還元の考え」をフッサールが持ち合わせていたことにもジオルジは気づいている (DPM, p. 90, 邦訳104頁)。このような超越論的ではない現象学的還元が、すでに第一節において見た、心理学的-現象学的還元を指すことはいうまでもない。いずれにしてもジオルジは、現象学的還元の本来的意味を、自然的態度のなす一般定立を遮断することによって、現前する意識を主題化することと理解している (DPM, p. 87-91, 邦訳102-106頁)。しかしさらに、「所与の対象についての過去の知識、あるいは現前していない諸前提の括弧入れ」も現象学的還元によって生じる転換であるとされる (DPM, p. 91, 邦訳106頁)。自然的態度においては、私たちは現在の経験を過去の経験を通して評価しているから、現前する経験を、それ自身においてありのままに記述しようとするときには、その過去の経験やそれにもとづく知識が邪魔をするから、遮断しておく必要があるのである。この点についても、すでに第一節で見ておいた、フッサールの現象学的還元と同じであると考えてよい。

第二の形相的還元であるが、これは先ほど述べた自由想像変更の方法である。

第三の本質の記述であるが、これをジオルジは方法の一つとして際立てている。記述とは「現前しているものに加えることも、そこから差し引くこともしてはならないことを意味している」 (DPM, p. 89, 邦訳103頁)。先の自由想像変更によって際立ってきた本質を、直観的に把握して、それを記述する段階である。

ジオルジは、現象学的アプローチの原理と現象学的方法を以上のように理解しているのであるが、しかし、そもそもなぜ、ジオルジは心理学に現象学を応用しようとするのだろうか。その動機と、現象学への期待はどのような部分にあるのだろうか。

まず、ジオルジは心理学を遂行するための、新たな原理と方法の必要性を感じていた。彼は「人間科学」という言葉を用いるが、その言葉でもって「人間であることの本質的諸特徴に敬意を払うアプローチ」を意味している。自然科学は人間科学に先んじて安定した知識を獲得し発展しているが、自然科学が対象とするものは諸事物とその過程であるのに対して、人間科学が対象とするのは人間である。それゆえ研究対象の差異を考慮するならば、自然科学の方法を、人間科学の方法に単純に応用するわけにはいかない。もしそのようなことをすれば、事物を扱うように設計された手続きによって、人間が切り縮められて還元主義的に理解されてしまう。それゆえ、自然科学の方法とは、別様の新たな原理と方法が必要とされている、と彼は主張する（DPM, p. 70ff., 邦訳81-82頁）。では、新たな原理と方法が必要であるとして、それはなぜ現象学的アプローチなのだろうか。現象学のどのような側面に、ジオルジは可能性を感じ取っているのだろうか。

前節において、ジオルジの理解にしたがって、フッサールの哲学的現象学の原理と方法を確認しておいた。その際に言及しておいた、すべての原的に与える働きをする直観が認識の正当性の源泉であること、そして自由想像変更、さらに本質記述の方法、これら三つのうちにジオルジは現象学の優位性を見ている。まず、原的に与える働きをする直観を正当性の源泉とすることで、「経験されたものは何であれ、経験されたものとして、研究の正当な主題とみなされる」から、このアプローチは開放的である、とジオルジは述べる。つまり、経験されたものを、予断を持たずに、経験されたものとして扱うことで、研究の素材の間口を広く設定できるということだろう。たとえば、ある者が「幽霊を見た」と言うとき、幽霊が実在するか否かという問題とは切り離して、その者が幽霊を知覚したと感している経験そのものを主題として扱うことができるのである。また、自由想像変更の方法が「所与の関連性を決定するための広い視野を与えてくれる」から、これも開放性に寄与する、とジオルジは言う。これについても、もう少し補うならば、所与としての個別的な事実に限定されることなく、その個別的な事実を踏み台にして、自由に想像することで、個別的な事実がもつ幅広い可能性を通覧した上で、本質的な部分を分析することが可能になる、ということの意味していると思われる。さらに「所与が何であれ、それが現前するがままに正確に記述される」のであるから、記述的分析は厳密性を獲得する、とされる。記述とは、現前しているものに加えることも差し引くこともせずに、ありのままに言語的に確定することであるから、その意味で厳密なものとなるはずである。このように、現象学的アプローチに、探求の開放性と厳密性をジオルジは認めている（DPM, p. 70, 邦訳80頁）。

フッサールにとって現象学は哲学的な動機に導かれたものであった。しかしジオルジは心理学者として、心理学に関連のある現象学的分析を行おうとする。それは哲学的態度とは違った、二つの態度を意味するとされ、第一に、哲学的レベルにおいてではなく、科学的分析のレベルにおいて仕事をする、第二に、分析が哲学的なものではなく、心理学的感受性をもつものであること、である（DPM, p. 94, 邦訳109頁）。それゆえ現象学を人間科学、とりわけ心理学に応用するためには、フッサールの哲学的現象学に修正を加える必要がある、という結論に達する。

（DPM, p. 87, 邦訳101頁）。ジオルジは、フッサール現象学とその方法をかなり正確に忠実に理解した上で、その現象学的方法を応用して具体的な分析に取り入れようとする。それゆえ、哲学的現象学と、自身が目指す心理学の違いに敏感であり、哲学ではない人間科学としての心理学への応用に自覚的なのである。ジオルジが修正すべきとする点は、次の三点である。(1)分析対象となるデータが他者の記述によって得られること（DPM, p. 96f., 邦訳112頁以下）、(2)心理学的分析に用いられるのは、超越論的現象学的還元ではなく、心理学的-現象学的還元であること（DPM, p. 98f., 邦訳114頁以下）、(3)自由想像変更によって獲得されるものは、哲学的本質では

なく、構造であること (DPM, p. 100f., 邦訳116頁)。そして、そのような修正の後でも、自らの修正的現象学の方法が、現象学的地位を有することをジオルジは望んでいる (DPM, p. 94, 邦訳109頁)。これらの点は、ひとりジオルジの現象学的心理学だけに関わる問題ではなく、現象学的心理学一般に関わる問題であり、さらに、心理学だけではなく、現象学ないし現象学的方法の応用を考察する際に広く問題となるはずである。次節において考察することとしよう。

### 3. 現象学的方法の修正・拡張の問題

本節では、現象学を応用する場合の、フッサールの現象学的方法の修正について考察する。そのために、第二節において問題となっていた、心理学へと現象学を応用する際の修正点についてジオルジの主張にしたがって考察するが、その過程で浮かび上がってくるその他の問題についても合わせて検討することとしたい。

まず、第一の修正点は、ジオルジの現象学的心理学においては、分析対象となるデータが他者の記述によって得られる点である。フッサール自身の現象学は、反省によって、彼自身の意識体験を分析することで遂行されていた。「ブリタニカ草稿」においても純粹に現象学的な心理学のためには「本当に純粹な自己経験を確立すること」の必要性が主張されている (Hua. IX, S. 281)。それに対して、ジオルジの現象学的心理学の場合は、分析対象となるデータが、研究者自身の内省によって得られるのではなく、他者から得られている。そのため、最初の記述は他者の記述ということになる。このことはジオルジも気がついているように、重要な問題を引き起こす。すなわち、現象学の原理は、<原的に与える働きをする直観を正当性の源泉とする>というものであるから、他者からの記述である場合には、それは準現前化であって、この原理に反するのではないか、という問題である。これは別の表現でいえば、哲学的現象学は一人称的パースペクティブにおいて分析されるが、現象学の応用を考える場合に、他者のパースペクティブからの記述にもとづいて分析が可能か、可能であるとして、それは現象学の応用とは呼べないのではないか、という疑問である。

これについて、ジオルジ自身は、次のように述べる。「オリジナルな記述が他者に属している場合でも、その経験が起こった状況の多くは世界の側にあり、したがって、他者と共有可能である。さらに当然のこととして、ものを書くことの背後にある前提は、書かれたものを他者が読み理解できるという、まさにその点にある。つまり、書き手あるいは話し手の言っていることへの接近が起こりうる、ということである」 (DPM, p. 97, 邦訳112頁以下)。ここでジオルジが述べているのは、他者の言語的記述が指し示す世界の経験は、共有可能であるということである。そしてその共有可能性の前提となるのが、言語的記述を媒介とした理解可能性である。私たちは、他者が他者自身の経験について語るとき、その言語的記述を通して、他者が経験していること、および他者の経験している世界を理解し共有している。私たちは、言語的記述を媒介とした理解可能性にもとづいて、他者の世界ないし経験についての共有可能性をもっているのである。それゆえ、他者の世界ないし経験は準現前化しかできないとしても、共有可能であり、理解可能なのである。さらに、その他者経験の準現前化にもとづいて、自由想像変容を行うとしたら、そこにおいて浮かび上がってくる本質は、現前し端的に直観できるのだから、その意味では現象学の原理にしたがっていることになる。それゆえジオルジも次のように言っている。「分析、意味の分節化、そして形相的データへの直観的把握は、分析者の意識のなかで起こる」のであるから、現象学的基準に適合するのである (DPM, p. 97, 邦訳113頁)。このように解するとき、「ブリタニカ草稿」におけるフッサールの次のような叙述も理解できるものとなる。現象学的「還元とい

う方法は、自己経験から他者経験に移されるのであり、それというのも、他者の準現在化された生のなかで、それに応じた括弧入れを遂行することによって、彼の主観的な生のなかで現出者（「ノエマ」）をいかにして現出するのか（「ノエシス」）について記述することができるからである」（Hua. IX, S. 283）。

以上に加えて、他者の記述の採用の可否を、現象学的分析の検証可能性という観点から考えてみたい。他者から採取される記述に対して疑義が生じるのは、分析者としての現象学者が、自ら直面する経験にもとづいて記述を行っていないからである。では、哲学的現象学においてなされる一人称的パースペクティブからの分析を、他の現象学者が検証する場合のプロセスを考えてみよう。そうすると哲学的現象学者Aが行った現象学的分析を、現象学者Bが検証する際、他者である現象学者Aの記述を手掛かりに、現象学者Bは、他者Aの経験を準現前化している。そのB自身の準現前化にもとづいて、場合によってはB自身が自由変更にもとづく本質直観をしてみて、Aの分析に納得し合意できるならば、BはAの分析を検証したこととなる。つまり、実は、一人称的パースペクティブにおいてなされる哲学的現象学も、検証のレベルにおいては、他者との共有可能性と理解可能性を前提としている。学問的検証の手續きにおいて、他者の記述を手掛かりに、自身で経験を準現前化し、それを分析するというはつねに起こっているのであり、それこそが学問的営みなのである。

以上のように考えるときには、現象学的心理学が、他者からの記述を採用するからといって、現象学的ではないとする批判は当たらないと考える。そして、この修正は、現象学的記述の間口を広げ、現象学的方法を応用していく際に、重要な点である。

さらにもう一つ、他者からの記述を現象学的分析に採用できるか、という問題に関して、ジオルジは問題としていないのだが、考察すべきことがある。それは、他者からの記述をさらに一歩進めて、文学作品や歴史的事実を素材として採用できるか、という問題である。たとえば「新しい現象学 (Neue Phänomenologie)」を提唱しているヘルマン・シュミッツは、現象学的分析の素材として文学作品を利用している。

すでに考察したように、他者との、言語の理解可能性と世界の共有可能性がある以上、そして検証のプロセスにおいても他者の記述に基づくことが前提されている以上、現象学は他者の記述を排除すべきではない。そうだとすると、その範囲内には、文学作品や歴史的事実も含まれると考えてよいだろう。それゆえ、フッサールも『イデーン I』において次のように述べているのである。自由変更において重要な役割を果たす想像を豊穡にするために、「並外れて大いに活用されるべきなのは、歴史の提示する諸々の事柄であり、さらに一層ふんだんに活用されるべきなのは、芸術、特に詩作の提供する諸々の事柄である」（Hua. III/1, S. 148）。

第二の修正点は、ジオルジの現象学的心理学において用いられている還元が、超越論的現象学的還元ではなく、心理学的-現象学的還元であるという点である。心理学的-現象学的還元は、「超越論的還元ほどには根源的ではないが、しかしそれは、人間の心理学的分析にはより適切なのである」（DPM, p. 98, 邦訳114頁）。

この点、フッサール自身は、純粹心理学ないし現象学的心理学を、超越論的現象学の準備段階として位置づけつつも、同時に、現象学的心理学が経験的心理学に対して学問的基礎を提供する点において、独自の意義を認めていた（Hua. IX, S. 285ff.）。それでも、フッサールの超越論的現象学の方法を、厳密に忠実に受け止める立場からは、非超越論的に振る舞う現象学的心理学に対して、現象学的ではない、との批判の声も聞こえてくる。そして、このことは現象を諸学問分野へと幅広く応用していこうとする場合に、問題となってくるのである。つまり、非超越論的現象学の方法を、現象学的考察と認めるべきかどうかである。

この点、フッサールの超越論的現象学の動機と、現象学を他学問分野へと応用しようとする場合との動機の違いを考慮すべきである。フッサールは、彼自身の関心や問題意識を持ち、それに応じた方法と理論構成を考えた。しかしそれはフッサールの関心、問題設定にすぎない。たしかに、フッサールの関心や問題意識である超越論的問題は、根本的なものであり様々な問題に一定の基礎を提供することは確かである。しかしながら、それは、すべての者に共通な関心でも問題意識でもない。とするならば、関心や問題設定が異なる者が、フッサールとは異なる事象や分野を問う場合に、フッサールと同一の方法では対応できず、事象に合わせて整えられた方法や理論構成が必要となることは当然のことである。

ジオルジにとって、人間科学としての心理学の目的は、人間によって経験されている現象の諸々の意味を明瞭化することにある。それゆえ、超越論的意識にまで還元することなく、「心理学的に生きられた経験が棲まう、生きられた現実のレベルに近いところに留まる」(DPM, p. 98, 邦訳114頁)ことは、ジオルジの動機と関心に合わせて修正されるべき、現象学的方法の修正なのである。

この心理学的-現象学的還元に関して、もう一つ問題となるのは、研究の参加者(データ提供者ないし供述の被聴取者)も、自ら現象学的還元を行う必要があるのかという問題である。すなわち他者の記述は、自然的態度にもとづくものでよいのか、それとも現象学的態度にもとづくものでなくてはならないかという点である。

ジオルジは心理学に関してこれを問題としているが、実はこれは心理学だけの問題ではなく、現象学の応用を考えていくときにも広く問題となるはずのものである。哲学的現象学のように、現象学者の反省にもとづく一人称的内省により記述を行う場合は問題とならないが、しかし、その他の人文科学や社会科学に適用するときには、分析の素材を分析者以外にも求める必要があるからである。

これに関しては、他者の記述は自然的態度におけるものでかまわず、「現象学的概念と理論に関して素朴な状態に留めておくことが望ましい」とジオルジは考えている。その理由は、心理学的分析のためには、生のデータは「生きられたがままに、その諸々の曖昧さと関係で濁っていて、複雑で混合している必要がある」からであり、また素朴な状態にあるほうが、「研究者を「喜ばす」ためにはどうしたらよいか分からず、その結果、経験をどちらかといえば、率直かつまっすぐに語り」「偏りを防ぐ助けともなる」からであるとしている(DPM, p. 99, 邦訳115頁)。他者の記述を分析の端緒として手掛かりにする以上、データ採取の間口で恣意的な取捨選択を防ぎ、他者経験の豊かさを守ることが、他者の経験をありのままに分析するために必要となるのである。

とはいえ、先に論じた<哲学的現象学者間での検証の手続き>のことを考えるならば、他者の記述は現象学的還元を経たものであってもかまわないことになる。その場合でも、現象学的態度における他者の記述であることが明らかになっていれば、それを織り込んで分析すればよいと考えるべきである。

したがって、より一般的に考えるならば、他者からの記述の場合、記述において他者の恣意的な取捨選択が生じないならば、現象学的態度における記述でも、自然的態度における記述でも、どちらでもかまわない、ということになる。ただし、現象学的心理学の場合にはジオルジが述べるように、自然的態度における記述が望ましいと言えるだろう。

第三の修正点は、ジオルジの現象学的心理学においては、自由想像変更によって獲得されるものが、哲学的本質ではなく、構造とされる点である。ジオルジはまず、哲学の本質という概念が、科学者の間に拒否反応を引き起こすことを恐れて次のように言う。「自由想像変更の方法を

通して本質を探求する代わりに、私は、分析している具体的な経験の構造を求める。それを、その構造に属するより高いレベルの形相的な不変の意味を規定することを通して行う」(DPM, p. 100, 邦訳116頁)。変動する生データを科学者が扱うとき、抽象を行うことによってそのデータに共通の意味を抽出して構造を叙述することはつねに行われているから、構造という術語で表現する方が、科学者に受容されやすいというのである。

さらに、「哲学者によって獲得される本質と心理学者によって叙述される構造との間にはまた、ある根本的差異が存在する。本質を求めるとき、哲学者は、つねに、普遍的本質を求める。つまり、対象がそれ無しではそれでは無くなってしまふような、そういう特徴を求める。そのような仕方では普遍化することは、心理学的な関心を超越してしまう」と述べる(DPM, p. 100f., 邦訳117頁)。その際、ジオルジは「学習」の本質について語り、学習の本質を「何か新しいことをなすこと、あるいは理解することにつねに関わる」と言うことができるが、それでは、本質的には真であっても、学習という現象の心理学的性質を説明することにはならない、と述べる。これは、類的普遍化が進みすぎると、内容が空虚になることを指していると考えてよいだろう。それゆえ、心理学において求められるべきは、心理学的本質であり、フッサールも『イデー I』において、哲学的な普遍的本質とは「異なるタイプの本質を容認している」と言う(ebd.)。それゆえ、自らの本質をフッサールも認めている、と述べるのである。このフッサールも容認したとされる「異なるタイプの本質」を、彼は別の箇所「形態学的本質(morphological essences)」と呼んでフッサールと関連づけている(DPM, p. 121, 邦訳139頁)。

第一節において確認したように、フッサールの本質は、低次の本質から高次の本質に至るまで様々な類的普遍性の段階において広がった、幅広い本質なのであり、普遍性の低次の段階においては、類型的本質ないし形態学的本質と呼ばれる本質を含んでいた。それゆえ、形態学的本質は、異なるタイプの本質というよりも、普遍性の段階が低次の、種的特殊性を具えた具体的な本質なのである。そのように考えると、哲学的本質も心理学的本質もどちらも本質である点においては同じであるが、前者が比較的高次の普遍性をもつ本質を指すのに対して、ジオルジの后者は、比較的低次の普遍性における本質ということになる。

しかし、「哲学者によって獲得される本質」と「心理学者によって叙述される構造」との間の根本的差異は、その点に尽きるのだろうか。これを検討するためには、フッサールとジオルジが、具体的分析において、どのような事象を扱い、どのような「本質」を取り出してくるか、を吟味する必要があるだろう。

フッサールは、本質直観ないし形相的還元において、具体的分析において、知覚体験や意識体験を分析し、色知覚の本質や、意識体験の本質等を取り出してくる。色知覚の分析においては、色の知覚という、比較的単純な事象について、自由変更を用いて分析していく。その場合問題となっているのは色の知覚という一つの要素である。

それに対して、ジオルジは、たとえば「嫉妬についての簡潔な叙述」に対して分析を行う(DPM, p. 139ff., 邦訳161頁以下)。そこでは、二つの叙述を題材に分析が行われるが、いずれも英文で一頁に及ぶ比較的長い、複数の人物が登場する、ストーリー性をもったエピソードである。その分析の際、ジオルジは心理学的な分析のために様々な操作を行い、心理学者らしい洞察と分析をなしているのだが、ここでは取り上げる余裕はない。重要であるのは、このエピソードが、複数の要素に満ちていて、自由変更をしようとしても何をどのように変更したらよいか分らず、自由変更が非常に困難であるように思われる点である。さらに、現象学的心理学的分析の結果、ジオルジによって取り出されるものが、「構造」と呼ばれている点である(DPM, p. 167, 179, 邦訳190頁, 203頁)。ジオルジは、先に本質を構造と言い換えた、少し後の箇所、

「構造」とは、全体における「構成要素の間の関係」である、と説明している (DPM, p. 102, 邦訳119頁)。そして、このエピソードの分析結果がまさしく、ジオルジが言うところのそのような意味での「構造」の分析となっているのである。

では、どうしてジオルジの分析は、構造分析となってしまうのだろうか。この点を考えてみよう。フッサールのように、一つの要素から成り立っている、比較的単純な事象の場合、その一つの要素に関して、自由変更を行うことができる。自由変更は、一つの事例から出発して、経験的な事例であれ、想像にもとづく事例であれ、自由に変更してみても、それを変更してしまうとはやそのものではなく、という変更の限界を探りつつ、その限界の範囲内に留まる諸々の変項を通覧することで、重なり合いとしての共通性を直観するものである。たとえば、事物における色知覚を、個別的な知覚を出発点として、想起や想像によって様々な色知覚を準現前化することができる。そうすると、「色知覚が広がりが必要とすること」や「色が明度を持つこと」が本質として直観される。自由変更において、その本質がいわば不変更の軸となっている。ところが、ジオルジの分析事例のように、複数の要素から成り立っている場合には、個々の要素は自由変更可能だとしても、エピソード全体に関して、自由変更することはできない。そうすると、エピソード全体の本質を、自由変更によって取り出すことは、不可能ということになる。むしろ、その複数の要素が全体においてどのように関係しているか、ということの問題とせざるを得ないのであって、それがまさに「構造」なのである。それゆえ、ジオルジも実際の分析結果に関しては「構造」という語を用いていると考えられる。そのように考えてよいならば、ジオルジの分析において探求されているのは、類の普遍性としてのフッサールの本質ではない、と言えるだろう。もちろん、個々の要素について、形態学的本質ないし類型的本質を把握するために、自由変更を行い分析に役立てることは可能であるし、有効だろう。しかし、複数の要素を含むエピソードの全体の分析であるならば、そこで取り出されるものは「構造」である。

以上のように考えるとき、形相的還元の方法は、事象に合わせて適切に修正可能なものとして、広く捉える可能性が開かれてくる。フッサールの本質についての理論は、意味のイデア性やカテゴリーの対象性を問題とした、『算術の哲学』や『論理学研究』の延長線上にある。フッサールの本質についての関心は、それ以後の彼の探求においても、ときに非主題的なものとして背景に退きはするものの、一貫して維持されている。それゆえ、事実を一般化して把握するときの理論的説明や方法が、事実と本質との関係の中で練り上げられ自己理解にもたらされたことはフッサールにおいては必然的である。しかしそれは、私たちが経験を分析するときの唯一の方法ではないし理解の仕方ではないはずである。ジオルジの実践と探求は、このことを指し示していると考えることができよう。

#### 4. むすび

これまで、現象学的心理学における方法と、それに対するジオルジの修正について考察してきた。その結果として、(1)現象学的分析の素材となるデータが、他者による記述でもよいという可能性、(2)現象学的還元は、超越論的な還元でなくてもよいという可能性、(3)形相的還元の方法は、それを通して把握されるものがフッサールの意味での本質である必要はなく、事象に合わせて適切に修正することの可能性が導かれた。これらの帰結は、どのようなことをさらに導くのだろうか。現象学的方法を修正することの射程を確認しておこう。

まず、現象学的分析の素材となるデータは、一人称的パースペクティブで語られる記述に限られず、他者による記述でもよい、ということは何をもたらすだろうか。現象学を広く諸学問分野

に応用しようとするときには、分析者自身の内省的意識分析だけではなく、より広い範囲でデータを収集する必要があるだろう。特に社会的な事象について現象学の応用を考えるときには、その必要性が高いと思われる。ただ、言い添えておくべきは、重要であるのは、単に他者からの記述を利用できるという結論を導くことではなくて、他者からの記述を用いる際にはその記述の性質に応じた取り扱いが必要となる、ということである。そのために、ジオルジの考察と実践はひとつの手掛かりとなるだろう。

次に、現象学的還元が超越論的還元でなくてもよい、ということは、現象学の応用範囲を広いものとするだろう。そこで問題とされる主観性は、超越論的主観性ではなくて、世界内の経験的な主観性ということになる。そうすると、超越論的主観性についてのフッサールと現象学の膨大な研究成果は、現象学の応用からこぼれ落ちてしまうようにも思われる。しかし、超越論的主観性が、経験的主観性を可能にするものである以上、超越論的現象学の成果は、現象学の経験的な応用に理論的基礎を提供するものと思われる。

最後に、形相的還元の方法を、事象に合わせて適切に修正し、広く捉える可能性が導かれた点である。実際、フッサールの現象学の方法を応用しようとするとき、フッサール自身の本質分析の過程とその結果は理解できても、それと同様のことを自らの事象に当てはめようとするとき困難を感じる人が多い。その原因の一つは、フッサールとは異なる事象を分析する場合、フッサールの方法がうまく当てはまらないことがあるからだ。そうだとすると、フッサールの方法を厳格に適用しようとして挫折してしまうより、事象に合わせて方法を修正すること、そしてその修正と分析成果を考察吟味することで方法を発展させていくことは、現象学を応用する一つの道であるように思われる。

現象学を、哲学以外の事象に応用しようとする試みには二つのタイプがある。第一は、哲学的現象学が行った哲学的分析の成果として獲得された概念や洞察を使って、応用先の事象を説明し解釈し分析するタイプである。いわば分析のための概念的道具立てを哲学的現象学から借りてきて分析するのである。それに対して、第二は、哲学的現象学の方法を、応用先の事象に自ら応用し分析するタイプである。第二の場合も、理論的な意味での方法論的考察に留まり実際の記述や分析を実践していないことが少なくない。それに対してジオルジは、第一の面も持ち合わせているが、基本的に第二のタイプであり、さらに具体的応用の実践者である。彼は、フッサールの現象学を忠実に理解しようとした上で、それに自覚的に修正を加え、自ら方法を実践しており、この点は高く評価できる。実際に当てはめることで、その事象に応じた仕方、現象学的方法の修正点も見えてくる。これについてはジオルジも、「私は、この方法を心理学的現象に応用することを試みる中で、哲学的現象学を読む中で学んだのと同じくらい、学ぶところがあった。この方法を使う現実の実践は、哲学的現象学と同じほどに、理論に貢献したのである」と述べている（DPM, p. 139, 邦訳159頁）。諸分野の事象を分析し解明して、新たな知見や洞察を獲得する力が現象学にあるならば、具体的な応用と実践の中で、現象学的方法は鍛え上げられ発展していく可能性をもっているのである。

最後に、現象学の応用と修正を考えるとき、大きな問題となるのは、現象学とは結局のところどのような営みなのか、という点である。フッサールの現象学の方法と、ジオルジの修正された方法を見るときに、現象学としての共通性はどれくらい残されているのだろうか。これについては、フッサールとジオルジの現象学を比較し考察しただけでは、もちろん結論など出すことはできない。ここではただ、暫定的な見通しを述べるに留めておきたい。

ジオルジの現象学の方法を見るときに、基底を流れているのは、生きられた経験があるがままに捉えようとすることであり、経験にどこまでも寄り添いながら分析を進めていこうとする態度

である。そしてジオルジ自身も、フッサールが「いっさいの原理の中の原理」と呼んだ、「すべての原的に与える働きをする直観が認識の正当性の原理であるということ」に忠実であろうとしている。つまり、現前する現象に寄り添うことが、現象学の基本的精神と言えるだろう。現象学の方法は、結局のところ、この精神から導き出されるものでしかないように思われる。フッサールが自らの事象のために、自らの事象に合わせて彫琢した方法を、他の事象に無理矢理に応用することは、却って現象学の基本精神に反することになるだろう。それゆえ、現象学の方法について緩やかな解釈を許すことは、現象学が、心理学に限らず諸学問に受け入れられていく可能性を広げるし、それに加えてより幅広く現象学の精神が諸学問分野に広がっていくことにつながるのである。<sup>6</sup>

- 
- 1 「ブリタニカ草稿」は「第四草稿（最終稿）」を用いる。以下、「ブリタニカ草稿」と呼ぶときには「第四草稿（最終稿）」を指す。
  - 2 *Edmund Husserl Gesammelte Werke, Bd. IX, Phänomenologische Psychologie. Vorlesungen Sommersemester 1925*, hrsg. von W. Biemel, 1962. [Der Encyclopaedia Britannica Artikel, 谷徹訳『ブリタニカ草稿 現象学の核心』ちくま学芸文庫]. 本書から引用は Hua. IX と略記してページ数を示す。なお、引用に際しては翻訳を使用させていただいた。記して感謝したい。引用は基本的に邦訳書に従ったが、一部改変している。本稿における他の文献に関しても同様である。
  - 3 *Edmund Husserl Gesammelte Werke, Bd. III/1, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie. neu hrsg. von Karl Schuhmann, 1976.* [渡辺二郎訳『イデー I -I』、『イデー I -II』みすず書房]. 本書からの引用は Hua. III/1 と略記してページ数を示す。
  - 4 *Edmund Husserl Gesammelte Werke, Bd. II, Die Idee der Phänomenologie. Fünf Vorlesungen*, hrsg. von Walter Biemel, 1973. [立松弘孝訳『現象学の理念』みすず書房]. 本書からの引用は Hua. II と略記してページ数を示す。
  - 5 Amedeo Giorgi, *The Descriptive Phenomenological Method in Psychology. A Modified Husserlian Approach*, Duquesne University Press. [吉田章宏訳『心理学における現象学的アプローチ』新曜社]. 本書からの引用は、DMP と略記してページ数を示す。併せて邦訳の頁数も記す。
  - 6 本研究は科研費（25580008）の助成を受けたものである。